アークレイよりの使者

せきにゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アークレイよりの使者

【Ｎコード】
Ｎ６０７６Ｐ

【作者名】
せきにゃ

【あらすじ】
彼女は、アークレイからやってきた。
そしてただただ、この世界を救ってくれた。

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（一）（前書き）

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（一）

一幕　「聖者の贈り物」

山間の小さな街では、快晴だった数日を無きものにするかの如く、ひたすら雨が降りしきっていた。

寄り添うように並ぶ民家は、同じデザインで整然とし、レンガと木々で組まれた色合いまでもが統一されている。美しく生え揃った樹木に、茶色い石畳が連なる歩道。炉辺に置かれた古めかしい木造ベンチが、閑静な風情を増長させる。

小高い山々に囲まれたその街は、紳士的な隠れ里の様相を呈していた。

ただそれも、ここ数日までの話である。

普段、誰もが寝静まるはずの真夜中に、街頭は明々と街を照らし、その路地では多くの男達が倉皇（そうこう）として蠢いていた。

「いたか？」

「いや、東から南には見当たらない」

路地には数人男達が慌ただしく集合し、互いの情報を交換していた。

「北方面は？」

「あちらにも何も。それより、機関に連絡はとったのか」

「連絡はした。だが……アマゾネスは別のアークレイに手を取られているらしい」

「なっ！　……では、どうしろと！」

「別のアゼルに依頼を申請したが……到着は、いつになるか分からないらしい」

ガシャ、と銃を投げつける音がした。

口髭を携えた中年男性が憤った。

「くそぉぉ！　こんな時に使えん奴らだぁ！」

「だが、避難は完了している。最悪の場合、ここを放棄し逃げるのが……――――」
「どこをどう見て避難が完了している！　最早、空路も航路も避難民で溢れかえっているのだぞ！　ここを放棄すれば、それで逃げられる相手だと思っているのか！」
「落ち着けダニー」
丸々と肥えた男が、ダニーの肩を押さえて落ち着かせようと試みた。男達の中でもひと際年配者に見えるその男が、その風格通りに冷静な口調で彼へ言った。
「逃げる場所は、どこにもない。だからこそ私達はここへ残り、この街を守ろうとしているのだろう。今は、アゼルが来るまで、ここで耐えるんだ」
しかし、ダニーの喧噪は冷め止まない。
「アゼル、アゼルってなぁ、お前等！　そいつらがネフィリムを引っ提げて来るかもしれないとは考えないのか！　金に狂った堕天使どもが、ネフィリムの奴等を呼び込んでいるとは思わないのか！」
これに、年配の男も顔を俯けた。
「仮に、そうであったとしても……私達は、祈る事でしか生きる術は無いのだよ」
憤懣に、だが物悲しくも唇を噛み、ダニーも肩を落とした。
「人も……落ちたものだな」
降りしきる雨の中、ダニーは悔しさに拳を握っていた。

そんな重く暗い井戸端会議を、近くも遠い場所から聞いている者がいた。
言い合いの交わされる傍の民家の窓から、杖をついた老人がじっと様子を窺っていた。
窓の隙間から入り込む雨の雫が、閉じたカーテンを隈なく濡らし切り、ポツ、ポツ、と水滴を床へ垂らす中、カーテンを開けもせず、微かに空いた布の隙間から男達の会話を覗き見ていた。

男達の話も終わり、誰もいなくなった路地は単調に流れる雨音だけが響き渡る。
「……ふぅ」
とても小さく、一人だけの暗い部屋で息を吐き、老人はコツコツと杖を突きながら部屋を出る。廊下に出ると燈る白髪を軽く掻き、顔色は一つも変えることはなく、ただただ無表情に廊下を歩く。
弱くなった足を引きずり、涼しく入り込む夜風に時折せき込み、老人は廊下から見えた部屋へと向かう。半開きになった別室のドアへと片手をかけて、力一杯、それでも弱弱しくそれを開いた。
老人は、再び息を吐いた。
それは、安堵のための溜息か。

そこには、純白の大きな翼を携えた、年端もゆかぬ少女が居た。

少女は、粗悪な生地のワンピースから羽を出し、敷き詰められた毛質の良い絨毯の上に寝転がっていた。足を上下にパタパタと、大きな翼を左右にゆらゆらと、無表情ながらも楽しそうに何かを見つめていた。
彼女の目の前には、三角錐のガラスビンが二つ、上下に連なりサラサラと砂を落とす、それがあった。
「砂、どけぇ」
三角錐から砂が落ちきると、少女はそれを逆さにする。
「じゅっぷん」
また、砂時計をじぃっと見つめた。
そんな羽の生えた少女を見つめる老人もまた、表情を変えることなく部屋を歩いた。少女の脇をゆっくりと通り過ぎると、隣接した小部屋へと向かう。
レンガ造りのキッチンと近代的なガスコンロ。そこに置かれたままのヤカンへと火を点火する。ステンレスに焦げ目のついた銀のポットがゴロゴロと音を立てる頃、老人はふと足音に気がついた。

てくてくと歩み寄る小幅な足音は、コンロの前で立ち止まり、ビシっと人差し指を突き出した。
「こおちゃ」
それだけ言うと、翼をひらひらとはためかせ、幼く丸い瞳を老人へと向けた。
しかし、老人は顔を横にふる。
「これはまだ、お湯だよ」
少女は、くりくりとした瞳と腰まで伸びる銀髪を傾けながら反復する。
「お、ゆ……」
疑問から生まれた自身の言葉に、はっと気がつき、ポンと目蓋を広げる。
「お湯。知ってる」
「ほう。これは、知っているのかい」
「知ってる。熱い、水」
老人の顔が微かにほほ笑んだ。
「そう。熱い、水だ」
しかし、老人の答えに少女は不服そうにポットを睨みつけた。
「お湯……いやだ。こおちゃがいい」
「あぁ。今から、紅茶にするよ」
老人はティーポットへ茶葉を入れ、カップへと湯を注ぐ。再びヤカンをコンロへ置くと、程良く沸騰するまでそのまま待ち、ティーポットへ湯を注ぐ。そんな仕草を、不思議そうに眺める少女は、
「おぉぉ……」
っと、ポットで赤茶色に変色していくお湯に呟いた。カップに入ったお湯とポットのそれを見比べては、関心そうに目を丸める。
老人は、そんな少女の顔の前から、さっとカップを取り上げお湯を捨てる。そしてゆっくり、三度に分けて紅茶を注いでいく。
一つのカップに紅茶を注ぐと、そちらに少女は顔を向け、また一つのカップに紅茶を入れるとそちらに顔を。せわしなく交互に視線

を向けた。
「こうすると、おいしくなる」
「……おいしく……なる」
少女の前で紅茶の最後の一滴を入れ終えると、そちらのカップを指差した。
「こちらがベストドロップだ。持っておいき」
「うん」
目の前のカップへいっぱいに腕を伸ばし、両手でそっと持ち上げる。
その様子に、老人は声をかけた。
「それでは、熱くいだろう。ここをお持ち」
カップの取手を指差し、また自身で持って例を示した。
しかし、少女は首を傾げた。
「熱い？」
熱しきったカップを平然と握りしめるその姿に、老人は溜息とも安堵とも取れる息を吐く。
「そうか。君等には、平気な温度のようだ……」
「？」
「いや、そのまま持っておいき」
疑問が残る顔付きだったが、少女は絨毯の間へとてくてく歩いた。そのまま絨毯の真ん中でちょこんと座ると、一口紅茶を口運ぶ。
「はぁー。おいしい」
声色を一つも変えず、それでも翼を弛緩させて肩の力は抜けていた。老人は揺り椅子へと腰をかけると、少女へ言った。
「椅子に座って飲みなさい」
目の前のロッキングチェアに指を差すと、少女は「う～ん」と悩んで椅子を見つめた。暫くすると、背中の翼を小さくバサバサと動かした。
老人は理解した。
「それが、邪魔になるのかい？」

こくりと頷く少女に、老人は紅茶を一口飲むと、表情を和らげた。
「だったら、そこでいい。リラックスして飲む事こそが、紅茶の嗜みだ」
「……たしなみぃ」
紅茶をじっと見つめて一口飲むと、再び羽を弛緩させる。
「はぁ……たしなみぃ」
落ち着いた静かな空間で、しばり二人は紅茶を嗜んだ。空いたカップがテーブルに出揃う頃、床に寝転がり砂時計を眺め始めた少女へ、老人が訊ねた。
「ところで君は、名前は何というのかな？」
少女は起き上がると、首を傾げた。
「なめぇ」
うまく聞き取れなかったのか、反復する言葉が曖昧だった。老人はクスっと笑うと、ゆっくりと少女へ指を差す。彼女がいつもそうする様に、指を差す。
「君の、な、ま、え、だよ」
老人の指先をじぃっと見つめ、見つめて、見つめ、目が寄り添うほどに近づくと、彼女は顔を上げた。
「ん？」
老人は指を下げた。
「そうか。君にはまだ、名前が無いか」
少女は顎に人差し指をあてながら、考えた。そして、ポンっと手を打つと、ビシっと老人を指差した。
「なめぇ」
「あぁ。私かい？　私は、ロバート・アルファード」
「ひょばぁろはるふぁろ」
ふふっ、とロバートが笑うと、それを見て少女は言った。
「名前。私……無い」
「そうか……まだ、名前も……」
と、老人が呟き始めた時だった。玄関のドアから激しいノック音

が響いてきた。
少女がこれに立ち上がろうとするや否や、老人は声を張ってそれを止めた。
「待ちなさい！」
少女が振り向くと、老人は杖をついて椅子から立ち、少女の肩に手をあてた。
「座っていなさい。絶対に、ここから動いてはいけないよ」
怪訝色に顔色を染めるも、少女は黙ってその場に座った。
「いい子だ」
老人は部屋を出て、きっちりとドアを閉めた。そして、厳しい顔付きでノックが鳴る玄関へと急がす向かった。
「何かね。こんな夜遅くに」
玄関の前には、小太りの男と、口髭の男が立っていた。ダニーは声を荒げて老人に詰め寄ってきた。
「調べてないのは、ここだけなんだ！　何か隠してないだろうな、爺さん！」
詰め寄る中年男性を、老人は洟であしらい一蹴した。
「ふん。こんなところに、何もあるはずがなかろう」
「そんな事、調べてみなければ分からないだろ！　耄碌(もうろく)した目では、見えない物があるかもしれんのだ」
詰め寄るダニーの肩を、小太りの男が力強く引きとめる。
「ダニー！　私達はそのような事を言いに来たのでは無い！　少し黙っていろ！」
思わぬ威圧に、ダニーは気押された。
「だ、だが……ビルさんよ」
ビルはダニーに変わりロバートへ頭を下げた。
「申し訳ありません長老。彼等が生まれて初めての襲撃に、何分気が立っておりまして」
この言い草に、ダニーは不審に顔を傾げた。
「おい、ビルさん。まるで、昔にもここが攻められたような……」

ダニーの言葉に、ビルはロバートの顔色を窺った。そして、ロバートの頷きを見て、ダニーへ言った。
「そう。これが、二度目の襲撃だ」
「……そんな」
「ロバートさん達の勇敢な防戦によって、子供だった私は命を救われた。その御足も、その時に負傷されたものと父より聞きました」
ダニーはぐっと息を呑み、ロバートの片足を見つめた。
「今回、このように迅速な避難ができた事もすべて、その後にロバートさん達が最善の避難経路を模索し、作り、たび重なる訓練を行っていただいたがためにできた事だ。感謝すべき事業は多々あれども、罵声を上げる非礼など、何一つ我々は持ってはおらん。そうだな、ダニー？」
切に語るビルの横で、ダニーは唇を噛みしめ頭を垂れた。
「長老、最早あの時の戦線に加われたのは、あなただけです。私どもに、どうかお知恵をお貸しいただきたいのです」
真摯的に頭を下げるビルをじっと見つめ、ロバートは低い声で彼等に告げた。
「空を、見ていなさい」
「空？」
言われた通りに、ビルは暗い夜空を見上げてみた。
「黒い煤が空を覆い、一つに集結する時、ネフィリムとなる。五十年前、私はそれを見た」
そう言って、ロバートは二人に背を向けた。
「銃器は、奴らには効かない。あがくのならば、刃物がよいだろう」
「あがくって……爺さんは退治したんじゃねぇのかよ！」
ダニーが声を上げると、ロバートは立ちすくみ、首を振った。
悲観の溢れるその背中に、ダニーは自然と口を閉じた。
「わしらは、時間を稼ぐだけで精一杯だった。アゼルが来るまでの、時間稼ぎだよ。それですら、千を超える屍(しかばね)を……ここに作ってしまったのだ」

アゼルという語句がここでも登場し、ダニーは不快そうに舌打ちした。それを背中越しに捉えたロバートは彼に告げた。
「その目で見れば、分かるだろう。あれは、人の逆らえる相手ではない。お前達も早々に、逃げるべきなのだよ」
そうしてロバートは、バン！　と音を立てつつドアを閉めた。
二人の立ち去る足音を聞きつつも、ロバートはいかめしく眉を寄せながら部屋へと戻った。
ドアを開ければ、言われた通りにじっと座っていた少女が、丸い瞳を傾ける。
ロバートは重く息をはき、少女に訊いた。
「君は、もう空を飛べるのかい？」
一瞬きょとんとした顔になりつつも、少女は座ったままに翼をはためく。放たれる風圧がバタバタとカーテンを揺らし、揺り椅子をギシギシと横に押していく。
次第に小さな体が持ち上がると、足も床から離れていった。
間違うことなく、少女は浮いた。
それをロバートはしっかりと確認すると、細く皺の寄る腕を少女へ差しだした。
「もういい。来なさい」
少女は翼を収めると、不思議そうにその手を握った。
すると、突如その手に力が込められた。ロバートが力を振り絞り少女の手をぐっと引いたのだ。老人は少女を廊下へ連れ出し、連行していく。杖をつき、足を引きずり、汗だくになったその手で少女を引きずった。
少女は激しく困惑し、自然と抵抗する。彼女にとっては微かな力で、ロバートの手を引き返した。
「っぐ……」
手を引かれた反動は、老人の足に負担を与え、苦悶の表情へと変えさせた。
「あっ！」

それでも彼女を引こうとするロバートに、少女は反発することを止め、彼の力に任せるように後をついて歩いていく。
廊下を進み、階段を上り、ついた先は暗くも明るい部屋だった。
大きな窓からは月日が差しこみ、さらさらとレースカーテンが揺れていた。老人は窓をあけると、ベランダへと少女を立たせた。
「お行きなさい」
冷静な声で囁いくと、冷たい雨が吹き付けるベランダで、老人はじっと少女を見つめた。
「一昨日の夜、君はここに倒れていた。おそらく君は、あの日のアークレイからやってきたのだろう。アークレイは、君をここへと運んできた。だがね、あれが運んでくるのは……君だけではないのだよ」
少女は事が理解できず、それでも悲しげな瞳に変わってく。
「君はまだ、生まれたばかりだ。戦い方など知らないのだろう……今すぐ、逃げなさい」
これに少女は首を振った。
「いや……」
「ここに居ては……」
と、その時。ロバートが激しくせき込んだ。膝を崩し、杖では支え切れずに体を折る。
少女は駆け寄り、膝をつく。
「ろばぁろはるふぁろ！」
言い切れない発音に、ロバートは笑ってみせた。
「ふふっ……そうだった。君には、まだ名前が無かったね」
せき込む口から手を離すと、そこには赤い吐血が夥(おびただ)しく流れていた。初めてみた血液の色に、はたまた力無きロバートの様子に、少女は唖然と佇んでしまった。
そんな少女に、ロバートは顔を上げた。
「メアリー」

ただ茫然と動かぬ少女へ、老人は震える指で指差した。
「君は、メアリーだ」
少女は一度頷き、反復した。
「めぇありぃ」
老人はたった今、メアリーとなった少女の手を取り、共に立ちあがらせた。そして、翼の生えた背中を向けさせる。
翼に付着していく雨の玉を、震えるその手で丁寧に払いのけ、メアリーにこう告げた。
「メアリーの名を持ち、君は、生きてくれ」
そうして、とん、とメアリーの背中を押した。
押し出される温かい手に、メアリーは飛ばずにはいられなかった。降りしきる雨の中で、少女は空へと浮かび上がった。
だが、彼女は一向に進もうとはせずに静止してしまう。雨降る闇夜で立ち止まる彼女は、遂には顔をロバートへと向けようとしてしまった。
だが、
「行きなさい！」
そんな少女に、ロバートは大きな声で叱咤（しった）する。
静かな雨と、半分顔を出した小さな月。そこへ彼女は顔を仰向けながら、老人へと深謝した。
「こおちゃ、おいしかった」
冷たい雨と暗い雲へと、少女は旅立った。
その純白に彩られた翼が消えていくと、老人はポケットの中からロケットペンダントを取りだして、中に入った写真に語りかけた。
「これで、私の仕事は終わりかの……メアリー」
成人を迎えたばかりの、娘の写真であった。

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（二）

行くあてもなく空を舞う。いよいよに月も雲に覆われた頃、雨の水量は減ってきた。雫が時々鼻先を掠めてゆくが、羽への重みは随分と楽になっていた。

メアリーは一先ず街へと降ると、二枚の羽をバサバサと震わせ水を払う。羽へと数多に乗っかる水滴はそれで拭い落とせたが、衣服までそうとはいかなかった。水を吸い上げた粗悪な生地は、とても冷たく重い。着心地のほどは最悪だった。

「んん……」

辺りを見回すと、メアリーはある物を発見し、

「あっ」

と、そこへと歩み寄った。

ショーウィンドウのガラスケースの前に立ち、

「はぁあ……」

顔付きこそ変えないものの、見惚れたような声を出した。彼女の興味をそそったものは、意匠をこらした白衣のドレスだった。子供用に繕われたそのドレスは、細かな所にまでレースによる装飾が施され、まばゆいダイヤこそは着かないものの高級感を漂わせている。

「はぁあ……」

再び物欲しげに溜息をつくやいなや、今度はやや眉根を寄せて顔を傾けた。

「ん？」

明るい電燈に反射したガラスケースには、見知らぬ人影が映っていた。

「手を上げろ」

カチっと聞こえる引き金の音に、メアリーは微塵も臆することなく振り返ろうとした。

だが、

「動くな！」
男の怒号に、その挙動を止めた。メアリーは静止しながら、ガラスに映る男を見つめた。立派な口髭を携えた、峻厳な眼差しを持った男だった。
男は、メアリーに問う。
「お前が、依頼したアゼルか？　そうだとすれば、所属とナンバーを言ってもらおう」
初耳の語句がいくつか並列した。メアリーは仰ぎ目で「う～ん」と考えるも、
「ん？」
阿呆気に首を傾げた。
男は、苛烈に憤怒の形相を作り出し、ぐっとトリガーを握りしめた。
「貴様ぁ！　貴様がここへ、ネフィリムを呼ぼうとしているのだな！」
しかし少女は、首を傾けたまま疑問符ばかりを浮かべている。
「へふぃひむ」
この言い草は、男の逆鱗に触れたことだろう。
「貴様ぁあああああ――――――――」
怒りの奇声を上げながら、本気でそのトリガーに力を込めた。
その時だった。

黒い羽が一枚。ひらひらと空から舞い降りた。

瞬間。男の視界が、黒い翼で埋め尽くされる。黒い大きな羽が少女を覆い隠していた。
少女を守るように折られた翼は、その両翼を大きく広げ、本体となる女性の姿をその場に登場させる。
活発に跳ねる茶色い髪。透き通るような白い肌。ダメージ加工のジーンズに、首をすっぽり隠す黒いタートルネック。そんなカジュ

アルな女性が、少女の前で胆と立ち、大きな瞳と黒き翼を持って、ダニーを睨みつけていた。
「あたしの仲間に手を出すっていうのなら、てめぇら人でも、ぶち殺すぞ」
舞い散る黒い羽の中で、彼女は男を睨みつけていた。
髪に溜まった雨水が、だらだらと男の顔を濡らしていく。
気圧された男は、尋常ならざる震えに見舞われていった。
「おっ……お前は……」
この問いに、彼女は呆れたように肩眉を吊り上げた。
「あ？　あたし等を呼んだのはお宅だろ？」
威圧はそこそこに抑えて言ったが、男はついに水溜りの中へと尻餅をついてしまった。
「しょ……所属と、ナンバー……を」
先とは打って変わり、同じ台詞にも覇気が無かった。
「あぁ、はいはい。お前等はそれ言うまでアゼルって認めねぇんだったな」
彼女は耳を穿りながら、男へ告げる。
「日本所属のナンバー３３。……っと、コードネームも必要なんだっけか？　えっとなぁ」
続けて話そうとする彼女の前で、男はぶつぶつと呟き始めた。
「ニホン……３３……」
そして男は、彼女の黒い翼に向かって大きく目を開く。
「……黒羽」
その言葉に、黒羽と呼ばれた女性は溜息をついた。
「知ってんじゃねぇか。だったら話が早い。こいつは、うちで保護すっから、お前等は一切手出し無用だ」
「なっ、何を言う！」
男はふらつきつつも立ち上がり、怖気つきながらもいきり立つ。
「その娘が、ネフィリムを呼び寄せているのだぞ！」
大きな声で叫び付けるも、眼前の女性はたいそう見下したように

突き放す。
「は？　なに時代遅れな事言ってんだよ。アレを産んでんのはアークレイ。あたしらにそんな力は無いんだよ。呼ぶなんて事ができんなら、こんな辺鄙な街に呼ばねえつうの。ただでさえ人で不足でてんてこ舞いになってるって時に、そんな面倒くせぇ事誰がするか」
唾を吐くように言い捨てると、身動きできない男に背を向けた。
「んじゃ、ま、とりあえず譲ちゃんは……」
言いながら振り返ると、メアリーはガラスケースにべったりと両手をつけていた。
「はぁあ……」
目の前の出来事などまるで無視して、白いドレスに見惚れていた。そんな少女に、黒羽は呆気に取られるも、すぐに気を取り直しメアリーの視線の先を追ってみた。
「ほう。譲ちゃんは、あれがお気に召したか」
そう言いつつメアリーに目を向けると、びっしょり濡れたワンピースからポツポツと水が滴っている。
「おい！　ずぶ濡れじゃねぇかよ！」
「じゅぶ……ぬれ」
語意は理解できなかったようだが、とりあえず、と言った様子で頷いた。黒羽は「ふぅ」と息を吐くと、ドレスを眺めながら彼女へ言った。
「仕方ねえなぁ。んじゃ、お姉さんが一つあれをお前さんに……」
と、ジーパンから財布を取り出しパカっと開くと、その手が止まった。
ドレスの脇に置かれた、値札を発見してしまったのだ。
黒羽は声に出して、それを数える。
「いち、じゅう、ひゃく……一万……十、万……十万ユーロぉおお――――――」
黒羽は反射的にペシン！とメアリーの頭を叩いた。
「お前、ちょっと他の物にしろ。お姉さんは偽善者じゃねぇんだ」

頭を叩かれた事など気にかけず、メアリーはじぃっと店内を見回した。そして、ビシっ！　っと一つのドレスに指を差す。それは、ダイヤをふんだんに散りばめたウェディングドレスだった。
「無理無理無理！　あんなもん値段見るまでなく、駄目だ！」
それを聞くと、メアリーはやはり元の白い子供用ドレスに指を差した。
「あれ」
「んん……」と、激しく眉間に皺を寄せる黒羽を、メアリーはじっと見つめる。
「いや、さすがに……給料との割が……」
言いかけたものの、メアリーが黒い羽をぐっと引っ張った。
「分かった、分かった！」
「あれ！　あれがいい！」
更にぐいぐいと黒い羽を引っ張りまわす。
「だから、分かったって！　ほんと……お前は言いだしたら引かねぇからな」
そこまで言って、黒羽は怪訝色に顔を染めた。羽を掴むその手を払いのけ、少女の前にしゃがみ込むと、まじまじと彼女の瞳を見つめ始めた。
「……お前、どっかで会ったか？」
メアリーも暫し彼女を見つめたが、大きな瞳を横へ傾けた。
「そっか。まっ、よくある事だ。たぶん……いつかどこかで、会ってんだろうな」
陽気そうな顔の中にも、辛辣の棘をどこかに宿し、彼女はすっと立ち上がる。
そして後でしり込みしていた男へ訊いた。
「あんた、ここの亭主を知らねぇか？」
ダニーは一歩後退り、小さく返答する。
「お、俺だ」
「そっか。だから、ここで店を守ってたってわけか……」

黒羽は呟きながら、財布に挟んだ小切手を取り出し、さらさらと金額を記入していく。
「まっ、殊勝な事だが、逃げるなり物をどっかに隠すなりした方が賢いってもんだぜ？」
金額を書き終えると、小切手を男へと差しだした。
しかし男は首を横に振り、声を嗄わがらせた。
「だ……誰が！　誰がお前等などに売るものか！　お、お前達に売ったなどと、皆にばれでもしたら……」
「はぁ……ほんと田舎もんだな、おっさん。時代をしっかり見極めろよ……。あたしらアゼルには、騎士階級ってもんが与えられてる。それは、英国貴族よりも一つ上の位なんだよ」
そして黒羽は、バン！　と、ガラスケースに手を翳し、鋭い睨みを男へ送った。
「それがどういう意味か……分かってんのか？」
説明すると、ガラスケースへ押し当てた手の隙間から、黒い粉が溢れだしてきた。それらはガラスを這うように一面に広がってゆくと、ガラス全体を締め付けるように、ギシギシと音を立て始める。
「奪おうと思えば、いつでも奪えるんだよ」
禍々しくガラスを這いずる黒い粉に、また尋常ならざる威圧の前に、男は震えながら頭を垂れた。
「……分かった。持っていけ」
それを聞くと、黒羽は黒い粉をその手に収め、平然とした様子で頭をかいた。
「ったく。欧米で窃盗なんぞやったらもんなら、アマゾネスの野郎共がうるせぇんだよ」
ピンっと小切手を風に乗せ、男の前へと飛ばした。その意図を男も理解すると、嫌々と小切手を握りしめて店内へと入っていった。
男がショーケースに入ってドレスをもぎ取ると、
「あっ」
と、メアリーが心配する。しかし、すぐに出てきた男の手にある

それを見て、ほっと胸を撫で下ろす。
黒羽が確かに男からドレス受け取る様子を傍らからしっかり見守り、
「ほらよ」
と、投げられた純白のドレスをがっちりと受け止めた。漸く手にしたドレスを見つめ、メアリーは、うんうん、と満足げに頷いた。
そんなご満悦そうな素振りを見ながら、黒羽は大きく翼を開き、メアリーの両脇に両手を添えた。
「じゃ、ちょっと散歩でもいくかな」
そのまま飛び立とうとする黒羽に、男は焦燥した。
「まっ、待たんか！　ネ、ネフィリムはまだ出現しておらんのだぞ！」
「あぁ、出たらやるよ。詳しい契約とかその辺りの事は……」
黒羽が顎で路地の先を差した。
「あいつに聞いてくれ」
そんな路地の先からは、一人の男が走ってやってきていた。
「お――――い、アン！　どこに行く気だぁ！」
黒い髪を揺らしながら、切れ長の目を携えた若い男が走ってやってきた。男はすぐ傍まで走ってくると、肩で息をしながら膝に手をついた。
「はぁ、はぁ……。お、おい、アン……今から、仕事だろう」
メアリーは、一つの単語が気になった。
「あ、ん？」
黒羽がこれに答えた。
「あぁ。あたしの名前だよ。黒羽はコードネームだ」
メアリーの声を男は察知し、アンに声をかけつつ顔を上げた。
「なんだい、その子……は……」
顔を上げ、しっかりと少女を目視するやいなや、男は驚愕とも唖然とも言えぬ面持ちで、その目を大きく広げた。

「……君、は」
男の歪な反応。
それがやや府に落ちない様子で、アンが訊ねた。
「あぁ？　お前さんまでデジャブか」
「あぁ……ちょっとね」
アンは溜息をついて説明した。
「アゼル同士のデジュブでいちいち取り乱すなよ。よくある話だろ」
「あぁ、あそうだね」
「多分、ここに出たアークレイから来たんだと思う。危なく殺られそうだったんでな、あたしが保護したよ」
「あっ……あぁ……そうか」
男は戸惑いを即座に消して、少女へと片手を出した。
「よろしく。僕の名前はジャックだ。コードネームは、灰羽」
「はい、ばね」
例の如く反復しつつも、メアリーは首を傾げ、男の背中を見た。
男の背中には、何も生えてはいなかったのだ。
「あ、あぁ、これかい？」
少女の視線の意図を察すると、ジャックは健やかにほほ笑み背中を丸めた。
「ん！」
軽い掛け声と共に、突如として灰色の翼が背中に現れた。写真を見比べるかのような一瞬の変化に、メアリーは丸い目をさらに丸く広げた。
その様子を、アンは察した。
「なるほど。本当に、まだ来て間もないみたいだな」
アンはジャックに視線で合図を送ると、メアリーを抱えてふわりと宙へ浮き上がる。
「んじゃ、あたしはコイツに色々教えっから、後は頼むわ」
そう言い残し、アンは翼を震わせ闇の中へと飛び去って行ってし

まった。
残された二人の男は、有無を言うまでも無く視線が合致した。
「ま、そういう事です。代表者の方には僕がお会いしましょう」
ジャックが挨拶とばかりに手を差しだすも、ダニーは夥しく流れる水滴に、動く事すらままならなかった。

「私、飛べる」
アンの雑な抱え方が気に入らないのか、メアリーはじたばたとアンの手を振りほどこうとした。
「そうかい？　まぁ、雨も止んでるしな。自分で飛んでみな」
ふっと両手を手放すと、メアリーは自身の翼を大きく広げた。
「どこ、行くの？」
「んっ、そうだな。お前さんには色々と教えてやらねぇといけないからな……とりあえず、あそこだ」
アンは街を見下ろす小高い丘を指差した。メアリーは無言で、うん、と頷き、アンの前を優雅に飛んでいく。
少女の後をのろのろと追いながら、アンは独白していた。
「二枚の白い羽……か。っつても、白羽なんかゴロゴロいるからな。無難に名前をそのままコードネームにすっかなぁ。って、まず名前がいるのか……さて、どうするか」
ぶつぶつ独り言を唱えるアンにメアリーが振り返る。
「ん？」
「あっ、いやなんでもねぇよ」
メアリーを先に進むよう促して、アンはじっとその二枚の白い羽を見つめた。
「二枚……か。二枚？　って！　あぁ———考えても仕方ねぇな」
もやもやした様子で、アンは頭をかいていた。
二人が丘へたどり着くと、まずアンは翼を大きくはためかせ、突風を地面の草へ送り付ける。強烈な風に草が靡くと、みるみる雨に落ちた水滴が飛ばされていく。

だが、アンは地面に手を添えると不服そうに目を細めた。
「やっぱ土までは乾かねぇか」
そう言って、地面よりやや上方に手を当てる。するとそこから黒い粉がもくもくと現れ、小範囲で地面を覆って行く。
「んっ！」
気合を込めると、それらは瞬時に凝結し、黒い絨毯ができあがった。
「おし。んじゃ、とりあえずお前さんは、その服着替えちまいな」
メアリーはこの魔法じみた情景を別段おどろきもせず、「うん」と頷き、ドレスを抱えて前に見える大きな木の後へ駆けて行った。
「別に、隠れなくても見やしねぇけどな」
どん、と黒い絨毯に腰を据えた。
暫くすると、木陰から格好の良いスカートの裾が見え、小さな声がこだました。
「できた」
アンは顔だけ振り返ると、特別絶賛するわけでもなく、う～ん、とうねりを上げた。
「なというか……全身真っ白だな」
透き通るような白い肌。くせのない長い銀髪。繊細かつ流麗な白いドレス。そして、二枚の白い羽。確かに、全身が白で統一されていた。
アンの難癖にメアリーはイラっと眉を寄せ、ビシっとアンの衣服を指差した。
「黒」
次に翼を指差すものの、
「く……ろ……ぉ？」
言葉を止めて、メアリーは目を微かに広げた。指を差したアンの背中に、黒い羽が無かったのだ。
アンは困惑するメアリーを手招きし、隣に座らせる。
「まっ、見ての通りの、そういう事だ。黒はあたしのトレードカラ

ーだからな。翼が無い時でもどっかに身につけておきたいんだよ」
中途半端な説明に、メアリーは更に呆然と背中を見つめていた。
「おし、そのままあたしの背中を見ておきな」
アンは背中がよく見えるように体をやや傾ける。メアリーがじっと背中を見つめていると、次第に変化が起きてきた。アンの背中に、黒い粉が大量に充満し始めたのだ。
そして、
「おいしょ」
気軽な掛け声と共に、一瞬にして黒羽が形成された。
「はぁぁ……」
メアリーが思わず声を出すと、アンはニヤリと笑い、パチンと指を打つ。
瞬間、黒い羽が弾けるように粉へ変化した。
「はぁぁ！」
メアリーなりに、驚きの声を二度上げた。そんなメアリーへ、アンはたいそうな先輩面で説明した。
「さっきの奴もやってただろ。んで、あたしも、他のアゼルも、お前だってできる事だ」
「……あぜる」
「あぁ、アゼルってのはな」
アンはメアリーの翼にそっと触れ、雲の覆う空を見上げた。
「羽を持ってやってきた……アークレイよりの使者。人はそれを、アゼルと呼ぶのさ」
メアリーも、暗い夜空を見上げて呟いた。
「アーク、レイ」
アンは黒い翼を再び形成し、白黒並んで空を眺める。
「たぶん、あたしもあんたも、アークレイの向こうにいた。そしてこの羽で、あそこを超えてやってきたんだ。記憶を捨てて、過去を捨てて、あたし達はここへ来た」
「……きおく」

「そう、記憶だ。どうせお前も、昔の事なんかなぁんにも思い出せないだろ？」
暫く、じっと空の一点を見つめると、メアリーは頷いた。
「うん」
「もしかしたら、あっちの世界じゃ重犯罪人で、こっちの世界に逃げてきたのかもしれないな」
軽快に洟で笑いながら、呟いた。そして、パン！　と手を打つと、大きく背伸びをした。
「そんじゃ、話はここまで。とりあえず手始めに、ダストの練習でもやっておくか」
空気を変えるように、アンは陽気にそう告げた。
「だすと？」
メアリーが首を傾げると、アンは片手を翻し、掌に黒い粉を発生させた。
「これだよ。あたし等アゼルだけが使える特殊能力みたいなもんだな」
メアリーは、黒い粉をまじまじと、興味津々に覗きこむ。
「ダスト」
「これが何なのかは分かっちゃいねぇが、あたし等の羽がこれでできているって事は確かな事だ。ついでに、翼以外にも色々と作り出せるんだよ」
と、アンは地面に敷いた絨毯を叩いた。
「こいつみたいにな」
「私も、作りたい」
「おぅ、できるぜ。まずは、ダストを作るところから始めっか。……んん。手ぇ、出しな」
言われた通りに、メアリーは手を出した。その手の横に、アンはダストを形成した自身の片手を例として掲げて見せる。
「まずは手を開いたまま、表面だけに力を入れてみろ」
メアリーはぐっと片手に力を込める。

「もっと、手の平から汗を絞り出す感じだ」
さらにぐっと力を込める。
「だめだめ、全然ダメ。集中力が足りてねぇな」
これに、メアリーはイラっと眉間に皺を寄せた。
「うるさい」
「あぁ？　なんだって？　言っておくが、こんなもんは初歩中の初歩だぜ。ダストも出せねぇんじゃ形成も糞も無いってもんだ」
おちょくる言葉に集中力を乱されて、更に苛立ちが顔に浮かび出る。それを振り払うように、メアリーは目蓋を閉じた。
そんなメアリーに気付かないアンは、暫し偉そうに指導を続けるも、すぐに表情が変わっていった。
「おっ……おい、まじかよ」
まるで期待していなかった、と言わんばかりの顔色が除々に強張り始めた。
メアリーの力を込めた手の平に、小さな気泡が沸き立つ。白い粉が出現した。それらはゆっくりと玉を大きく広げていき、量も順調に増やしていく。
最終的には、アンが出したダストと変わらぬほどのダストを出現させた。
「ま、まじかよ……あたしでも、ここまでに一週間は……」
と、驚愕する自身の顔を左右へぶんぶん振ると、真剣な眼差しで指導を始めた。
「よし、そのままの量を維持してみな。力を抜かず、一定に保つんだ」
メアリーは目を閉じながら頷いた。それから一分。掌の宙で白いダストが維持されるのを見届けて、アンは更に難易度を上げていく。
「よし、次はそのままの力で、手を握れ。ゆっくり、ゆっくりだぞ」
目を閉じたまま頷くと、その小さな手をゆっくり閉じていく。指先が震えるほどに繊細な動きで閉じていく様に、アンは息を呑んで見守っていた。

宙に浮いた白い粉は、手の挙動と共に小さく固まっていく。ぼやけた白い塊も、ゆっくり密度を増して凝結していく。
終には、手の平ほどの白い球体となって、ダストは浮かび上がった。
「上出来だ。目、開けてみな」
メアリーは目蓋を開けると、自信の白い球体を確認し、その目を大きく見広げた。
「これ……私の」
アンはメアリーを褒めるように、ポンと肩を叩いた。
「あぁ。これが、お前のダストだ」
純白の小さな球体は、凝結できなかった白い粉を周囲に取り巻き、それはまるで夜空に浮かぶ月のように目映く輝いていた。
「よし。今日はここまで」
アンが高らかに終了を告げた。だが、メアリーはアンに振り向き不服を申し出た。
「まだ。まだできて……！」
と、その瞬間。白い球体がパリンと割れた。
「ほらな。まだまだ練習が必要なんだよ。つぅか、今日でここまでできれば十分すぎるんだよ」
軽く嫉妬めいた表情を浮かべながらも、メアリーの頭を無骨に撫でた。それでも、メアリーは不満げだった。
「でも……」
「焦る必要はないんだよ。形成さえできちまえば、後は時間の問題だ」
アンは、すっと前方を指差した。メアリーがその視線を追うと、やや離れた空中に黒いダストが形成された。
「鍛錬すれば、離れた場所にでも作れるようになる。そして……」
ぐっとその場で拳を握る。
黒い粉は即座に凝固。漆黒のクリスタルへと形を変えた。
「思いのままに、武器を作り出す事ができる」

「ぶき？」
彼女の疑問をさも聞き流すように、アンは顔を強張らせ、遠い空を見つめた。
「アークレイよりの使者。それは、あたし等だけじゃない」
アンはすっと立ち上がる。
見つめる遠い先の空に、黒いダストが渦を巻いていた。
それは、彼女のダストとはまるで別物。禍々しくとぐろを巻く蛇のように、空を旋回していた。
「ネフィリム。人は奴等をそう呼んでいる」
その語句は、ここへ来てから幾度か聞いたもの。ロバート、見知らぬ男から聞いた言葉。
メアリーはアンの視線を追い、黒い渦に気がついた。
「今日のところは、お前はここでじっとしていろ。下手に近づくと、アゼルの体とて容易に死ねる代物だ」
アンは黒い翼を大きく広げた。
「そんじゃ、仕事の時間だ」
漆黒に光る羽を携え、彼女は闇の空へと飛んでいく。
「……ネフィリム」
少女は呟き、ただそれを見送った。

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（三）

空が割れ、雲が裂けた。
とぐろを巻いた黒い渦は、急速に固まり、耳鳴りの如し金切り音を轟かせた。
大地が荒々しく揺れ動く頃、人々はこぞって口にした。
「ネフィリムだ！」
アークレイが生み出す魔獣の姿が、そこにはあったのだ。
縦長に伸びた丸く太い体躯は、全身を隈なく黒色で塗りつぶされ、体の至るところから幾本もの触覚めいた手足が動いている。地面に接した触手で体を動かし、余った触手で木々をなぎ倒す。手足のやたら多い蚤虫のようにも見えるが、その大きさがまるで違う。
街から見える遠い山に、くっきりと目視できるほど巨体であった。その頭と思わしき頂上部は、周囲の木々より遥かに上方。まるで山にできた漆黒のクレーターのように聳えている。
「第一種形体か」
慌て怯える人々をまるで気にせず、アンはジャックにそう聞いた。
「そのようだ。あれなら、僕等二人でもやれそうだ」
「はっ。ふざけんなよ。足手まといがいなければりゃ、もう2ランク上でも一人で狩れるね」
「んん……実際そうかもしれないけど、一応パートナーとして顔を立ててくれないかな」
「嫌だね」
のんびりと語り合う二人に、銃を持った男が叫びかけた。
「お、お前ら！　は、早く始末しろぉ！」
男の罵声に、アンは不機嫌そうに眉をひそめた。
「そう言われると……無視して帰りたくなるってもんだな」
と、その時。
ジャックが山を指差し、声を上げた。

「来るぞ！」
瞬間、山に居座っていたネフィリムの胴体が、空に向かって跳ね上がった。跳躍された斜面が削れ、地面に映った影が街へ直進する。
と、それらが街へと到達した時、大地は縦に振動する。地響きと共に、突風が街を駆け抜ける。ガラスは割れて、車が転倒した。地面がひび割れ、断裂が走る。
アンは路地に転がる人々へ叫んだ。
「てめぇら、さっさと逃げやがれ！」
大きく翼を広げ、突風の根源へと飛び上がった。黒羽が猛進する姿を目で追って、ジャックは近くに居たビルへと告げた。
「それでは僕等はあれを退治に行きますので、手筈通り二次災害に備えて避難してください」
呆然さながらに、こくり、と頷くビルへジャックは微笑み、灰羽を広げて飛び立った。
街のあちこちから、ガス管が破裂する音が聞こえ始めた。

慌ただしく動く街並みは、小高い丘からはっきりと見て取れた。
街の至る所から火の手が上がる。
巨大な物体が、街の広場を占拠している。
それらが紡ぎ出す危機感を、勤勉に座していたメアリーも感じていた。
黒い物体が向きを変えるたび、地面は揺れて火の手が上がるのだから、これはきっと、あの物体の仕業なのだと感じ取った。
真っ赤に染まっていく街を見つめて、彼女はおもむろに立ち上がる。そして、その目を大きく見開いた。
これまでに無いほど、大きく、大きく見開いた。
「ろばぁろふぁるはぁろ」
少女は、白い翼を広げていた。
「で、相変わらず、あたしらは眼中に無いってわけか」

眼前に聳えるネフィリムの前に立ち、アンは耳を穿りながら見上げていた。目と鼻の先にまで接近している彼女に対し、ネフィリムは攻撃の素振りすら見せていない。
「まぁ、あたし等からすれば準備もしやすいんだがな」
ふわりと宙に浮かび上がると、触手の合間からネフィリムの後方を眺めてみる。そこでは、灰色のダストを大量に生成するジャックの姿があった。
ジャックは両手を胸の前で合掌し、集中してダストを生成する。作り出された灰色の粉は、ネフィリムを取り囲むように宙に流れ出していた。
しかし、異様に囲うダストの漂いにも、ネフィリムは反応しない。大きな広場で巨大な図体を左右に動かしながら、時折触手を民家にぶつける。まるで、何かを探しているようだった。体の表皮からは幾つもの白い球体を浮き出して、それを目のよう扱い周囲全体を探っていた。
アンはふわふわと浮き上がりネフィリムの頭上に陣取ると、小馬鹿にするように言葉を吐く。
「残念だったな。好物の人間共はみぃんな逃げちまったぜ」
ジャックへ視線を流すと、彼も準備を終えたと言わんばかりに目を開いた。
満を持して、アンは片手を上げた。
「おっぱじめるかぁ！」
と、アンの翳す掌に黒いダストが充満する。それらは黒いクリスタル状の鋭利な礫となって、その手の上で刃を光らせる。
「散れ」
刹那、クリスタルが直滑降でネフィリムへと襲いかかる。電柱ほどある太い触手へと、次々と降下していった。
猛烈なスピードで風を切るクリスタルは、触手にめり込み、そし

て裂く。
「うぉおぁあああああああああああああ」
痛み、苦しむようにネフィリムが悲鳴を上げた。そこで初めて白い球体をぐるりとアンへと向けると、敵と察知し触手を振り始めた。
「おせぇよ」
巨大すぎる鞭の群を、アンは悠々と飛びまわり回避していく。しかし、ネフィリムの大きな体は地響きに地面を揺らし、触手は街を破壊していく。
飛び散る街の残骸に、視界が次々と狭められていってしまう。
「何やってんだよ！　ジャック！」
触手と木片を躱しながらも、アンは叫ぶ。
「今……やるよ」
拝むように両手を添えて、ジャックは力を集中させた。
すると宙を囲んでいた灰色のダストが、一斉に凝固していく。それらは細い線状に形を変え、縦に走り、横に走り、網となってネフィリムに絡みつく。
「ふんっ！」
最後にジャックが根を入れると、それらはみっしりとネフィリムの体を緊縛した。
ジャックの網が胴体にめり込むと、ネフィリムはもがく様にその触手の速度を落としていく。
それを見計らい、アンは僅かに浮きあがった腹の下へとすっと降りた。
黒いダストが液体状に淀む、巨大な胴体。そこに片手を当てると、アンは粉末状のダストを生成していく。
冷静に、一部の油断も隙もなく、丹念にダストを片手へ凝縮させた。
「飛べ」

ダストが弾け、衝撃が迸る。苛烈なまでの風が片手に吸い込まれ、瞬時にネフィリムを後方へと弾き飛ばしたのだ。大きなマンションビルほどはあろうその巨体が、宙に浮いて吹き飛ばされる。
それは、広場の石畳をことごとく粉砕し、また背後に居たジャックに冷や汗をかかせた。
「おっ、おい！　僕も後にいるんだぞ！」
そう叫びつつ、ジャックは灰羽を急遽形成し、一目散に宙へと逃げた。
そんなジャックへ、またぶざまに倒れたネフィリムへ、アンは不敵に口元を歪めた。
「知るかよ」
唾を一つ、地面へ吐き捨てた。

後から襲ってきた風に、メアリーは思わず振り返った。その風がネフィリムへと向かっていると悟ると、すぐに顔を正面へ戻す。
その時、大きな物音と共に地盤が揺れた。酷い横揺れは民家をも容赦なく揺らしていく。振動に耐え切れず瓦解するガラスの窓、路面が盛り上がり倒れる電柱。メアリーの不安は一層に増してゆくばかりであった。
心ばかり足早だったその歩調も、街の臨戦的な雰囲気に呑まれて、いつしか駆け足に変わっていた。同じ模様の同じ家が立ち並び、ましてや彼女は内側からしか家を見たことがなかった故に、焦りの中に苛立ちさえも見え隠れした。
そんな折、メアリーは一つの家の前で足を止めた。
大きな窓に、見慣れたカーテンが架かっていたのだ。カーテンの裾からは赤い絨毯も僅かにみえる。メアリーは躊躇する事なくその家へと飛び込んだ。
たった二日、されど二日。この家で目をあけ、この家で人に出会い、この家で過ごした。彼女にとってそこは生家であり、この世界で唯一の見慣れた場所だった。

それ故に、彼女は不審に眉をひそめた。いつもどこかしらに燈っていた灯りが一つも無く、寂寞(せきばく)した暗闇に支配されていたのだ。メアリーが廊下に足を踏み入れ、ミシっと床板が鳴ったとしても、静まり返った家内はその音を無情に反響させるだけ。

彼女は思い出して、怪訝する。こうして彼女が廊下に出ると、必ず老人が声をかけては「どこへいくのだい」と訊ねてきたのだ。それが無いことに、メアリーは不信感を募らせた。

絨毯の敷き詰められたリビングを開けても、そこは闇。隣のキッチンへ行っても同じこと。階段を静かに上がり、彼女は数時間前に飛び立った、あの部屋のドアをゆっくり開けた。

少女は、大きく目を広げ、口を開けて驚愕した。

まるで生気を感じられないロバートが、ベッドで安らかに眠っていたのだ。

「ろばぁろふぁるふぁろ！」

メアリーは焦りベッドへ駆け寄ると、微動もしない老人の体を揺さぶった。

「ろばぁろふぁるふぁろ！」

不安と心配だけを募らせて、メアリーは何度も名前を連呼した。事態に困惑する少女の声が枯れる頃、老人の目蓋はうっすらと開いた。

「ろばぁろ、ふぁるふぁろ……」

漸く動いた老人に、メアリーは安堵し肩から力が抜けた。しかし老人の瞳からは、冷たい光だけが突き付けられた。

「なぜ、戻ってきた」

突き放す視線と声に、メアリーは困惑しつつも老人の手を取った。

「危ない……危ない、から……ここ」

彼女が言った傍から、例を示すように地響きに家が揺れた。今にも割れんばかりに振動する窓の音を聞き、老人は呟いた。

「そうか……始まったのか」

「うん。だから、逃げよう？」

促し、誘おうとする手を、老人は力なく振り払った。
「歩く力も……残っていない。一人で、お行き」
メアリーは白い翼を大きく広げた。
「私、飛べる……私、飛べるよ」
そうして、メアリーは老人の体を持ち上げようとした。
その時、老人は激昂に声を上げた。
「放っておいてくれ！」
残る力を振り絞り、最後の怒声をメアリーに突き付けた。不意な怒鳴りに、メアリーはびくっと背中を震わせ、思わず尻込みした。
半歩ほど下がったメアリーの前で、老人は顔を反らせると、小さく哀切を帯びた声で彼女に告げた。
「私は……君達を……怨んでいるのだよ」
萎れた声には、それを確信づけるだけの躊躇いも感じられる。何より、掠れるように震え始め、僅かに見える老人の目尻から、滴る水が見えてしまった。
ただただ、メアリーは動けずにいた。
「あの時……あの日……君達が、もっと早く来ていたら……メアリーは、死なずに……」
「……めぇ、ありー」
それは、彼女に向けられた言葉ではない。そう、十分に悟った少女は、顔を俯けた。
「私だけ……君達に、助けられるわけには、いかないのだよ」
声の震えは止まっていた。
静かに、冷徹に、伝えられた言葉の意思は、しっかりと少女に届いた。
「……うん」
翼を翻し、彼女は老人に背を向けた。何かを伝えようにも言葉が見つからず、メアリーは無言で部屋を立ち去った。
「君に、罪はないのだが……ね」

再び老人は、生気を失った。

メアリーがその家の玄関を閉めた時、またも地響きに路地が浮き、猛風が銀髪を通り抜ける。メアリーは奥歯を噛みしめ、拳を握る。

ギリっと風の吹く根源を睨みつけると、彼女はその羽を広げた。

「ねふぃりむ」

吹き荒れる風に乗り、高く空へと飛び立った。

「面倒くせぇなぁ、コイツはぁ！」

ジャックの作り出す灰色の格子から抜け出した触手は、容赦なく民家をなぎ倒し、またアンを狙っていく。アンが撃ち込んだ漆黒のクリスタルにより、その被害を最小限に留めてはいるものの、それらは無限に再生していく。

切り離した触手から黒いダストが舞い上がり、一瞬にして結合してしまうのだ。

そんな触手をかい潜り、空高く飛び出たアンは片手を翳しクリスタルを再度作り直す。

「なにが気に入らねぇってなぁ――――――」

先に生成したそれより更に数を増し、数百にも上るクリスタルを作り出す。

「ダストの色が、同じってのが気に入らねぇんだよ！」

叫び、打ちこむ。

ネフィリムはクリスタルの貫きに悶絶し声を上げるも、すぐさま再生を開始する。

そんなやりとりに、アンは頭をかいて呆れていた。

「おぉい！　まだ核は見つかんねぇのかよ、ジャック！」

後方のジャックはアンの催促を聞き、額に汗を溜め込みながらも返答する。

「もう少し……もう少しだ」
ネフィリムへと両手を翳し、その平から出る灰色の糸に神経を集中させながら、更に糸の数を増やしていく。
必死に作業を行うジャックを見ても尚、アンは苦言を漏らした。
「ったく、こんな街中でなけれりゃ、一発で方がつくってのによ」
悶々とする苛立ちに、やはり頭を掻かずにはいられなかった。
その時。ネフィリムを睨むアンの瞳が疑問を抱いた。
「ん？　どうした」
暴れに暴れまわるその触手が、不意に挙動を止めたのだ。触手だけではない、巨大な体をも静止して、表面に浮き出た白い球体を一斉にある方向へと向け始めた。
呆然と、食い入るようにネフィリムは一点を見つめ始めた。
それは、アンでもなく、ジャックでもない。広場へ通ずる、一本の路地だった。
この不審な様子に、アンもその先へと顔を向けてみた。
瞬間。
翼を広げ、目をかっぴらき、声を大にした。
「来るなぁ――――――――――――――」
路地に姿を現したのは、白い二枚の羽だった。
ネフィリムは大きな体を反転させると、メアリーに向かい急速に触手を伸ばした。
「馬鹿野郎！」
アンは即座に宙を駆ける。
しかし、その圧倒的な触手の速度には敵わない。フラフラと舞い出たメアリーに、触手が襲いかかった。
広間にたどり着いたメアリーは、状況把握もままならず、迫る触手に動きを止めてしまった。
その時、メアリーの耳にアンの声が飛び込んだ。
「ダストだ！」
声に反射し、メアリーは目を閉じる。そして、ありったけの集中

力を振り絞り、眼前にダストを形成した。
バギイッ！　と、亀裂が奔る音がした。
触手は白いダストに止められた。だが、触手がもたらす驚異的な風圧には耐えきれず、メアリーは後方へ吹き飛ばされる。
そこへ容赦なく襲いかかる新たな触手。
メアリーは、はっと息を呑み、無防備に絶望した。
だが。
「だから……来るなって言ってだろ」
目の前の触手に、次々と黒いクリスタルが突き刺さった。気がつけば、メアリーの体はアンによって抱えられていた。
「っち、面倒くせぇな」
黒羽は舌打ちをしながらも、次々に襲いかかる触手を躱していく。その腕の中で、自身が怒られているという事を悟りながらも、メアリーはじっとネフィリムを見つめていた。
「あれ、ねふぃりむ？」
「あぁ、あれがネフィリムだ。お前が立ち向かったところで、アゼルのレリーフが一つ、地面に出来上がるだけだな」
言いながら、触手を見事に回避しつつ、アンは上空へと舞い上がった。空中で立ち止まると、下方で息吹くように荒れ狂うネフィリムを睨めつける。
「にしても、奴さん、急に威勢がつきやがった」
と、言う間に触手が二人に襲いかかる。アンは冷静に片手を出して黒いダストを生成した。
ガギィッ！　と触手がダストに阻まれ、パン！　とアンによって振り払われる。
「しかも、お前を狙ってやがる」
不自然なネフィリムの動きに、アンはメアリーを見つめた。すると、何かに気がつき鼻をひくひく動かした。
「お前、人の匂いがついてるな……」
アンが問いかけるも、メアリーは何も答えずネフィリムを凝視し

ている。その頑固そうな表情に、溜息をはいてメアリーを宙に立たせた。
「はぁ……こんな時は、何を聞いても答えねぇ。そんな気がするよ、お前さんは」
どうしたものかと呆れかえるアンの前に、灰色の羽が一枚、ふわりと降り立った。アンはそれを手にすると、羽は形を変えて石板のような紙切れになる。
そこに書かれた文字を黙読し、紙切れを宙へと捨てた。
「なんだよ、結局ド真ん中かよ」
ふぅ、と息を整えると、アンはその眼光を鋭く光らせた。隣でじっと佇むメアリーへと声をかけつつ、すっと前進する。
「今度こそ、動くんじゃねぇぞ」
何も答えない少女に、アンは顔だけ振り返る。
「聞いてんのか？」
再度の問いかけに、メアリーは無言で頷いた。顔色こそは厳しいものの、アンは溜息をついた。
「まったく。マイペースってのも、時と場合を選んで欲しいもんだな」
それだけ告げて、パン！　と両手を合掌した。
黒い翼が凛と撓(しなり)り、黒いダストが溢れだす。それらはアンの両手へとまとわりつき、また蠢き始める。じりじりとうねりを上げて密度を増していくダストを見つめ、アンは両手をゆっくりと開いていく。
両手の間から、黒光りする物体が現れた。高密度に精錬された黒い刃、黒い柄。
月夜の光に照らされる、蒼黒の刀剣だった。
刀剣をその手に握りしめ、彼女は呟く。
「すまないな」
言葉だけをその場に残し、宙を蹴って降下した。

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（四）

「すまないな」

言葉だけをその場に残し、宙を蹴って降下した。
ネフィリムの体を目がけ、流星の如く加速する。
刀剣の光は風を切り、線となってそれを穿つ。
一閃。
放たれた漆黒のダストは半月を型取り、ネフィリムの銅を両断する。
その黒い体には、大きな亀裂ができあがっていた。
アンは着地する。
「終わりだ」
亀裂に風が猛烈に吸い込まれる。

そして、弾ける。

黒い塊が瞬時に粉と化し、吸い込んだ風を嵐のように吐きだした。
黒いダストは路地へと渡り、ガラスも、木片をも巻き込み街を吹き抜ける。
一瞬にして、街が黒い煤（すす）に覆われた。
地上のアン。後方のジャック。宙のメアリー。それらは胆としてその場に立ち、その終局を見つめていた。
黒い嵐が吹き終わる頃、山からは朝焼けの光が上ってきた。
そこに残されたのは、半壊した広場と街、大量のダストだけだった。
黒い粉が溜まる広場に、メアリーは何かを見つけ着陸すると、山になったダストへと歩いていく。
「これは？」

見つめる先に、浅黒くも丸い、ダストの結晶が浮いていた。
「それが、核さ」
「……核」
背後に歩み寄ったアンは、自身の胸に手を当てる。
「あたしらの中にも、それがある。それが消えれば、あたしらも粉になる」
「……粉」
メアリーが、核に手を触れようとした。
しかし、それはガラス細工のようにパリンと割れた。

「それが、死だ」
「……死」

突如、メアリーは形相を変えて街へと振り返る。
「……死！」
白い羽を広げ、街へと飛んでいく。
「おっ、おい！　どこ行くんだよ！」
アンの言葉に耳を貸すことなく、メアリーは街へと直進する。またもメアリーの奇っ怪な行動に呆れるアンへ、ジャックが飛んでやってきた。
「おーい、アン。どこに行くんだい、彼女は」
「知るかよ」
そう言いつつも翼を広げて、ジャックを引き連れメアリーの後を追って行く。街から上がる火の手に対し、必死で消化にあたる人々を余所目にして、三羽のアゼルが街を抜けていく。漸くメアリーが地に足をついた場所は、広場からは最も遠い街の最深部。火の手も半壊も少ない住宅地だった。
一つの家の前でメアリーは立ち止まり、裏庭から見える二階の窓へと顔を上げた。
その表情はどこか悲しげで、儚くもあり、一歩前へと踏み出すも、

すぐに思いとどまり一歩後退する。
その様子にアンが、
「なんだ？　空き巣にでも……」
と、茶化そうとしたものの、ジャックが真摯な眼差しでアンの前に手を出し、それを静止させた。メアリーの様子に何かを察し、その横に片膝をついて彼女へ囁く。
「ここに、何かあるのかい？」
二階をじっと見つめるメアリーは、小さな声で頷いた。
「……うん」
「そうか。それならば、一つ良い事を教えよう」
優しく微笑むジャックへ、メアリーは首を傾げた。
「いい、こと」
「そう。言葉で何かを伝えられなくても、僕達にはそれを伝える手段があるんだよ」
そしてジャックは、メアリーによく見えるように片手を差しだし、灰色のダストを生成して、石板を作ってみせた。
灰色のダストを見つめながら、メアリーは考えた。
「しゅだん」

時を同じくして、ロバートは永い眠りにつこうとしていた。
力の入らぬその手には、銀色のペンダントを握りしめる。中に入った娘の写真には、いつしか自然と亀裂が入っていた。
「怨みに、来たのかい……それとも、迎えに来たのかい」
嗄(しわが)れ、誰にも聞こえぬ小声で呟やいた。誰の返答も聞こえてこない静かな部屋。そんな当たり前の一瞬に、老人は声を出さずにくすっと笑った。
そして、心を落ち着け息を吐くと、もう開けるつもりも無い目蓋を閉じた。
その時を、ただ待つことにした。

暗い部屋に、朝日が差し込む。
何事も無かったかのように、その日が始まっていく。
閉まりきらぬ窓からは、さらさらと音を立てて風が舞い込む。
そんないつもの東雲（しのめ）に、ゆっくりと安らいでいく。

だがその時、頬に触れる冷たい感覚に気がついた。気がつくものの、気には留めない。無視をすることもなく、無視をした。
ただ、老人は気になった。冷たく触れるその何かが、次第に温かさを増してゆくことに。
ロバートは、開けるつもりも無かったその目を開いた。
そして、ぼんやりと見えるその光景に、唇を震わせた。

部屋一面に降り注ぐ、純白の粉雪だった。
それは次第に形を変えて、ひらひらと舞う羽となる。
老人は、思い残した最後の言葉を、その羽へと囁いた。
「ありがとう、メアリー」

一筋の涙が、枕へ流れた。

思いは伝え、そして伝わってきた。
裏庭で両手を組んでしゃがみ込んだメアリーは、その手に溢れる白いダストに、心を乗せた。
「なめぇ、ありがとう」
深く、深く、彼女は頭を下げていた。

四羽抄　一幕「聖者の贈り物」　（五）

「さて、そんじゃ帰るとすっかな。買い物気分の小旅行が、とんだ出張になっちまったぜ」
　アンは背伸びをしながら、消していた翼を形成した。街の出口へやってきた三人は、この場を飛び去ろうとしていた。
「君は、僕達と行くのかい？　このままここに残るなら、アマゾネスや他の欧米機関に所属するという手段もあるんだが」
　そんな説明をされても、メアリーには何も分からない。案の定、彼女は首を傾げ、疑問符を顔に浮かび上がらせた。
「ええっと、だな。つまり、僕等と行くか、他のアゼルの元へ行くか……」
　より分かりやすく説明しようと試みたが、その努力をあしらうようにメアリーは言葉を遮断する。
「いく。一緒に」
「そうかい。それじゃ、よろしく」
　優しく微笑むジャックに対し、アンは鼻を高くし胸を張った。
「来るに決まってんだろ。そいつぁ、あたしの弟子なんだからな」
「でしじゃない。でも行く……ん？　でしぃ？」
「あたしの生徒ってことだ！」
「せぇと……生徒。はぁ、生徒……」
　意味を理解するやいなや、メアリーはむっと顔を顰めた。
「生徒じゃない。私、賢いもん」
「はぁ？　誰がダストの生成から形成までを教えてやったんだよ」
　そんな事は忘却の彼方に葬り去り、メアリーは更に更に顔を顰める。
「賢いもん……。私、黒羽より賢いもん！」
「はいはい、賢い賢い」
「かしこいもん！」

「へいへい」
ジャックは二人のやり取りを見つめながら、怪訝そうに目を細めていた。それでも、微笑ましくも感じる光景に一息ついて力を抜いた。
「そんなことも、あるだろう」
と、微笑した。

そうして二人は帰路に、一人が岐路につこうとした時、三人の背後から幾つかの影が忍び寄った。それらの影はガチっと鉛の引き金を上げ、三人の背中へ声を発した。
「どこに行く気だ」
低く、敵意のこもるその声に、アンは剣呑（けんのん）に顔を歪ませ振り返る。
「あぁ？」
そこには、数人の男を引き連れたダニーの姿があった。小銃に指をかけ、銃口を三人に向け、憤怒に満ちた形相で三人を睨めしていたのだ。
「またお前かよ……」
アンがさも面倒そうに顔を背けるも、ダニーを含む男達の直視は揺るがなかった。
「街を……こんな状態にさせておいて、どこへ行くかと聞いている」
いっそう増していく敵意の量に、アンも殺気を満たしていく。ついにはその翼を大きく広げ、ダストまでも形成し始めた。
それに、ジャックが割って入った。アンの肩をポンっと叩くと、空気を変えるように軽めの口調で説明した。
「復旧修理等の事後処理は、後にこの街の所属機関の者がやってくると思いますので、そちらに聞いてください。ネフィリムによる特殊災害保険等の方は、私共は関与しておりませんので……」
取り繕った仲裁をこなすジャックだった。
しかし。
無情にも銃声が鳴らされた。

それは、三人の上方へ撃たれた威嚇射撃。
「はぁ……怨まれるお気持ちも分かりますが、私共も全力を尽くしたわけで……」
ジャックは慣れた様子で威嚇を受け流す。しかし、黒羽の限界点を突破するには、その威嚇は十分すぎた。
おいおい、と静止を試みるジャックを片手で押しのけ、アンは銃口の前へと歩き出た。
「言いたいことがあんなら、聞くだけ聞いてやる事にしてやっている。言ってみろよ」
とても話を聞く態度とは思えぬほどの顔付きで、アンは男達を睨みつけた。
ダニーもそんなアンに一歩も引かず、声を荒げた。
「お前達の、責任の所在はどこにある」
「はぁ？」
ダニーは憤る。大きく口を開けて怒鳴り付けた。
「これだけ街を破壊しておいて、お前達はのうのうと私服を肥やすのだろ！　そんな事のために、ここへネフィリムを呼び寄せたのかと聞いているのだ！」
激しい罵声に空気が震え、草木までもが風に揺れた。
ここへ来て、同じ事を二度言われた。
さすがの彼女も、あしらうだけで終わらせるにはフラストレーションが溜まり過ぎていた。彼女は親指を地面へ向け、声を尖らせた。
「だったら、核でも打って仕留めろよ。街なんか、地図から消えて無くなるがなぁ」
最大限の侮蔑を注ぎこみ、言葉の刃を突きつける。
そして、男達へと背中を向けると、メアリーの肩を抱きよせ、ジャックに顎で指示をした。
「行くぞ」
ジャックは溜息を、メアリーは怪訝そうに、それでも彼女と共に街に背を向けた。

見下された男達は、指を震わせ、怒りを噛みしめる。
「きさまぁ……きさまらぁあ……」
トリガーに掛かった指に、力がこもった。
「貴様等アゼルの分際で――――――――――――！」
彼等は、ついには愚弄に耐え消えず、怒号を鳴らして銃弾を発砲した。
空を裂き、うねりを上げて三人へ銃弾が撃ち込まれた。

しかし。

それらは、宙に浮く黒いダストに悉く弾かれた。それでも男達は発砲を止める事なく、狂気の形相で乱射していく。
「ねぇ。あれは？」
メアリーは事情が分からず、振り返ろうとした。しかし、肩を掴んでいたアンの手が、メアリーの頭に手を添えそれをさせない。
「別に、なんてことはない」
「なんて、ことはない？」
反復するメアリーの頭を、アンは優しくポンポンと二度叩いた。

「いつものことだ」

これが、人とアゼルの現状であった。

幕間

死にたいと思い、それでも生きて、ようやく死ねたのに、今は生きたい。

街を見下ろす小高い丘で、カナンはアシズにそう告げた。カナンによるいつもの口癖、不可解な口癖に少女は背中を丸めると、生える翼の手入れを始めてしまった。

真っ白な四枚の翼を手櫛で梳く様は、なんとも退屈そうだった。

そんなアシズに男は目をやると、空を見上げながらアシズへ言った。

「面白い話をしよう。四枚羽（しまいばね）」

四枚羽と呼ばれた少女はこれに振り向く。幼げな丸い瞳を興味津々に光らせて、うんうん、と頷き長い髪を揺らした。

「この世界は灰色だ」

四枚羽は口に指をあてると、首を傾げた。

「樹木の幹は黒く、その淵は白い糊代に覆われている。この空だって、黒と白。雲は黒く、空は白い」

男の指差す空に、四枚羽は顔を上げてみる。

「……しろ……くろ」

何度か言葉を反復するも、

「分からない」

と、やはり長い髪を斜めに傾ける。

男は微笑み説明する。

「いいかい。「白」とは、見えているのに見えない色。「黒」とは、見えないはずが、見えている色の事なんだよ」

「分からない」

四枚羽の即答に男は微笑し、暫し悩むと、ポン、と手を打った。

「目を、閉じてごらん」
彼女は素直に目を閉じる。
「それが黒だよ」
「うん」
「目を、開けてごらん」
「ん……」
光が目に入ったのか、彼女は顔を顰めた。
「それが、白さ」
「……うん。分かった」
「本当に分かったのか？」
四枚羽は無表情に、二度ほど頷いた。
「たぶん、分かった」
そう言って、彼女は不意に背後の木を指差した。
「黒」
男は優しく頷いた。
「そう」
次に彼女は両手で、木の輪郭をなぞっていく。
「白」
「うん。そうだ。やっぱり、四枚羽は賢いな」
男は優しく四枚羽の頭を撫でた。
「うん。賢いよ。黒羽よりは、全然賢い」
これに、彼はクスっと笑った。
「おいおい、黒羽が聞いたら怒鳴り散らすぞ」
と、その時、少女は何かに気がついた。
「あっ、黒羽は、黒」
「あぁ、そうだ。彼女の翼は黒なのさ。だから、僕等カナンは彼女を黒羽と呼ぶ」
四枚羽は興味深く、うんうん、と頷いた。
「そして、君の翼は純白だ」
「じゅん……ぱく」

カナンはアシズの四枚の翼にそっと触れた。
「ただの白じゃない。光を帯びた、美しい白のことだよ」
キラキラと光沢を帯びるその翼を、少女も見つめてみた。
「美しいって……どんな色？」
男は難色を示した。ごろりと転がり、黒と白の空を見上げた。
「美しいは、色じゃない。教えてあげたいけど……君達アシズじゃ、分からないよ」
「なぜ？」
真摯に向けられる彼女の瞳に男は苦悶し、僅かばかりの沈黙が流れた。
「カナンは、白と黒をまとめて『灰』と呼ぶ」
「……はい」
「そう、灰だ。つまり、この世界には一つの色しか存在しない。悲しみも、憎しみも、喜びも、すべてが一つに混同されている、灰色の世界。誰もが世界に満足し、誰もが欲求には駆られはしない」
アシズはここでも首を傾げる。それを見つめて、カナンは笑った。
「僕の羽を見てごらん」
カナンの翼をアシズは見つめる。それは、黒でも白でもない色であった。
「これが、灰さ」
「灰……」
「ここへ来て、僕等の喜怒も哀楽も、すべてが灰に染まってしまった。でも、やはり僕等は違和感を覚えずにはいられない」
「いわ、かん……」
またも四枚羽は首を傾げる。
「それも、アシズには分からないだろう。この地で生まれ、この地で過ごし続ける限り、君達には分からない」
男はすっと立ち上がると、その灰色の翼を大きく開いた。
「それでも僕は、カナンであって良かったよ。そう……思う」
灰色の羽をはためかせ、彼は飛び去った。

暫し、少女は空を見上げ指を差していた。
「白」
と言いつつ空を差す。
「黒」
と言いつつ雲を差す。
彼女の隣に二つの影がやってきた。だが彼女は二人を無視して、延々とそれを繰り返す。
「白」
「黒」
幾度も発せられる無限の連鎖に、隣の影がついに痺れを切らせた。
「って、うるせぇんだよ！　四枚羽！」
荒く甲高い声に、四枚羽は漸く隣のアシズへ視線を送った。
そこに寝そべった黒い羽のアシズをじっと見つめ、四枚羽はビシっと羽を指差す。
「黒」
「あぁ？　今度はカナンに何を吹き込まれたんだ？」
アシズが刺々しく短い髪を逆立てながら睨みを利かすと、その隣に座っていたアシズが口を挟む。
「カナン達は、あなたの翼を黒と呼ぶのよ。そう言いたいんでしょ四枚羽は」
短くもふわりとした髪を揺らせて、アシズはあきれ口調で四枚羽を補足した。
そんな彼女の羽にも、四枚羽はビシっと指差す。
「……」
が、四枚羽は沈黙した。
人差し指を向けたまま静止する四枚羽、そんな彼女の思考をアシズはうまく読み取った。
「あぁ、私の羽ね。これは、赤って言うらしいわよ」
「……あか」

ただただ反復する四枚羽に、アシズはやや怒り気味に説明する。
「だから私は赤羽って呼ばれているのでしょ！　もう少し頭を使いなさい。そんな事だから、カナンの連中にアシズは無知だの何のと小馬鹿にされるのよ。まったく」
赤羽の叱咤に、四枚羽はグッと奥歯を噛みしめた。
「……私、賢いもん」
背中を丸め、羽をしおらせる四枚羽に、黒羽はケラケラと笑っていた。
「かぁあっ！　言われてやんの！」
四枚羽は、二人よりも一際小柄な体をさらに縮めた。
「……賢いもん。黒羽より、賢いもん」
「はいはい。賢い賢い」
そうして弄る黒羽に、四枚羽は小脇にあった小石を投げ付け憤怒した。
「賢いもん！　黒羽よりは賢いもん！」
涙ながらの投擲を、黒羽は片手でパシパシと防ぎながら挑発を繰り返す。
「は～い、それはよかったでちゅねぇ。仲良しのカナンに色々と教えてもらって、少しは成長できまちたねぇ」
この言葉に、無関心を装っていた赤羽が呟いた。
「それは、あなたもでしょう」
微かに聞こえたその呟きに、黒羽はその羽をバサっと開き、そのまま停止した。
「……なんの、ことだ」
四枚羽に投擲される小石がガンガンと腹部に当たるも、お構いなしに身動きしない。
「その言葉、カナンがカナンの子に使う言葉でしょ。ここへ来る途中、そんな言葉を使うカナンの親子を見かけたわ」
「あ、あたしも……その親子を見かけて……な」
赤羽の瞳が、ギロリと光った。

「ごめん、嘘よ。それを見かけたのは、遥か昔の話だったわ」
「そ、そうだな……私も、遥か昔に……」
これに、赤羽は溜息をついた。
「別に、隠す必要はないじゃない。カナンと交友しても、誰も文句は言わないわよ。ただね」
赤羽は、手元に無くなった小石を探そうとキョロキョロしている四枚羽にも聞こえるように、声を張った。
「カナンは、いつか消えていく。傾倒すればするほど、その時が辛くなるわよ」
真剣な眼差しでの忠告に、黒羽はゴロリと地面に転がり赤羽へ背を向けた。
「ちょっと、あなたのためを思って言っているのよ！」
それでも無視する黒羽の横で、四枚羽が顔を向けた。
「消えない」
不安の陰りをその目に抱きながらも、四枚羽は言い切った。
「あのカナンは、アークレイに消えたりしない」
断固として赤羽の言葉に抵抗すると、その四枚の羽を大きく広げ空へと舞い上がる。
そのまま、丘から見えるカナンの街へと四枚羽は消えてしまった。
そんな四枚羽の行く末を、赤羽は心配そうに見つめていた。
「そうして消えていった……アシズもいるのに」

暫くの沈黙が過ぎた頃、二人きりになった丘の上で、黒羽が呟いた。
「なぁ。アークレイを見たら消えちまう。それって、本当か？」
「分からないわよ。見た事ないもの。ただ……」
「ただ？」
「アークレイに興味を持った者達は、例外なく消えている」
「……そうか……やっぱり」

風が、丘を吹き抜けた。
穏やかで温かな風に、黒い羽が震えていた。
「仲良くしてたカナンがな……消えたみたいだ」
その寂しげな声に、赤羽は大きく目を見開いた。
「ちょっと前から……様子がおかしかったんだけど、ここ数日、どこにも見当たらねえ」
「……それって」
黒羽はその翼を大きく広げ、宙へと浮いた。
溢れ出る異質な雰囲気は、赤羽の翼も広げさせた。
「黒羽！」
赤羽は黒羽の肩を握り、振り返らせた。
だが、黒羽の頬を伝った光に、彼女は膠着した。
「お前の、言う……通りだな。けっこう……辛いぜ、コレ」
初めて目にするその水に、初めて感じる困惑に、赤羽は声を曇らせた。
「あなた……消えない、わよね」
黒羽は、赤羽の手を振りほどく。
「消えねぇよ。たぶんな」
それだけ告げて、黒羽は消えていった。

それから幾日かの時が過ぎた。
街を見下ろす小高い丘には、四枚の羽と、赤い羽が座っていた。
「黒羽。ずっと来ない」
四枚羽が小さな声で問いかけるも、赤羽はぼんやりと空をだけを見つめていた。
「……そうね」
四枚羽は街をじっと見つめている。
「あのカナンも、ずっと来ない」
虚ろわな瞳で、赤羽は反復する。

「……そうね」
静かすぎる丘の上で、四枚羽は訊ねてみる。
「赤羽は、明日も来てくれる？」
灰色の空に向かい、赤羽は告げた。
「……そうね」

それからさらに幾許かの時が過る頃、小高い丘には、四枚の羽だけが座っていた。
「白」
四枚羽は空を見上げながら、呟いた。
「黒」
指を差して、呟いた。
誰もいなくなったその丘で、彼女は毎日をそうして過ごしていた。
「白」
空を指差す。
「黒」
雲を指差す。
「白」
空を指差す。
「黒」
雲を指差す。
途方もない数を反復した頃、四枚羽の指差す空に、異変が現れた。
「し……ろ？」
空に架かった、白とも、黒とも、灰とも言えぬ煌びやかな色だった。
誰に訊ねる事もなく、四枚羽は直感した。
「アークレイ」

虹色に輝く何かが、帯となって空に現れていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6076p/

アークレイよりの使者

2011年1月23日16時25分発行